

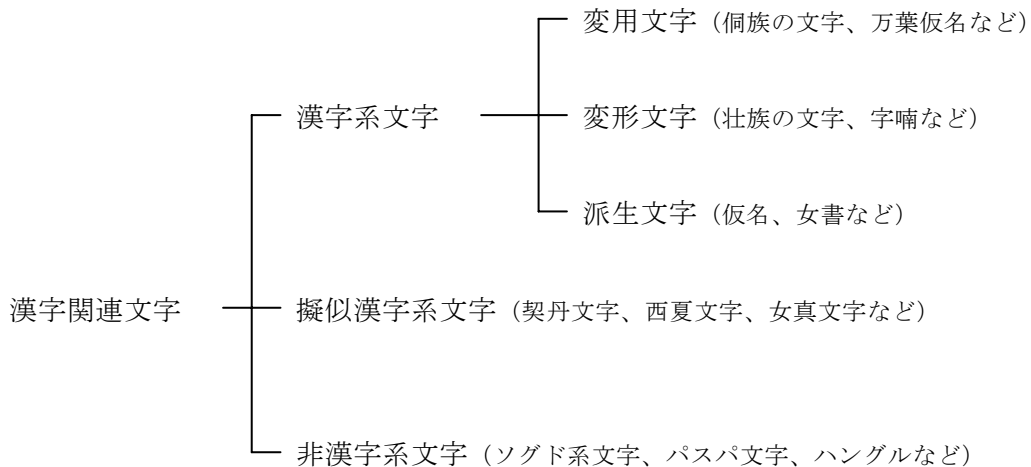
## 中国周辺の漢字系文字

吉池孝一

一

中国の周辺に位置する現在と過去の文字のうち、漢字に由来する文字群および漢字と関連の深い文字群を「漢字関連文字」と呼ぶ。その中身は、ベトナムの字喃(チュー・ノム)や日本の仮名など漢字から作られた文字、遼の契丹文字や西夏の西夏文字や金の女真文字など漢字に似せて創製された文字、モンゴル時代のパスパ文字や李朝時代のハングルなど漢字と系統を異にするが関連のある文字などからなる。なお漢字関連文字という枠組みの特徴は、漢字と系統を異にする文字を含めたところにある(注1)。

そこで、漢字に由来する文字群については西田龍雄 2002(注2)を参考にして用語をやや改め、新たに非漢字系の文字群を加えて諸文字の関係を図示すると次のようである(注3)。



上の図は、文字の系統分類を利用しているけれども、文字の系統を分類したものではない。系統分類であるならば、漢字系文字には漢字(狭義の漢字、すなわち漢語および漢語の祖先を表記した文字)を含めなければならないところであるがそれはない。上図は、文字の系統ではなく、文字組織全体から見た漢字との関連性によって分類を試みたものである。なおここで言う文字組織は、字形を形作る文字要素と文字、文字要素を組み合わせて文字を作る方法、文字を互いに区別したり同類に纏めたりする方法(注4)、表音と表意の方法、縦書き・横書き・分ち書きなどの文字配列法よりなる。

「漢字系文字」は漢字の文字要素から作られた文字群を一括したものであり、その下に漢字の利用法より「変用文字」「変形文字」「派生文字」（「漢字系変用文字」等とする場合がある）の三種をたてる。「擬似漢字系文字」はその名の示すとおり漢字に似せて作られた文字という意味であり、「非漢字系文字」は、漢字の文字要素に由来するわけではないけれども、漢字との接触により文字組織の何れかにおいて影響をこうむった文字である。

以上は漢字関連文字の全体である。本稿ではその中の漢字系文字についてやや詳しく述べる。

## 二

漢字系文字は、漢字が備える字形・字音・字義をそのまま用いるのではなく、何れかを変え自己の言語の表記に利用したものを指す。利用の仕方により分類し、「変用文字」「変形文字」「派生文字」の三種をたてる。この「変用、変形、派生」という用語は西田龍雄 2002 によったものであり漢字系文字の理解にとって極めて有用である。

「変用文字」は、既存の漢字の字形と字音を利用したもの（仮借）、及び字形と字義を利用したもの（訓読）が基本である。日本の『古事記』や『万葉集』（ともに 8 世紀）に使用された所謂万葉仮名がそれに当たる。「波流」という漢字の音を借りて日本語の「はる（春）」を表わす音仮名や、漢字の訓読より発した「名（な）津（つ）蚊（か）為（し）」を用いて日本語の「なつかし（懐）」を表わす訓仮名がある（注 5）。万葉仮名は新たな組み合わせ文字すなわち変形文字を用いていない点で、変用文字の典型といえよう。

なお、先の漢字関連文字の表の中で侗(カム)族の文字を変用文字の下に置いたけれども、この文字は万葉仮名とはやや異なる。中国の湖南省・広西壮族自治区・貴州省一帯の侗族は、「消」という漢字の音を借りて侗語の [ca:u]（きみたち。あなたたち）を表わし、「風」という漢字の意味を利用してこれを侗語の [ləm]（風）で読んだ。前者が漢字音の仮借で後者は訓読であり、変用文字ということになる。侗族の文字は変用文字が主体であることから、上図では変用文字の下に収めたけれども次のように変形文字も用いる。意味を表わす人偏「亻」と発音を表わす「不」を組み合わせる新たな文字「𠂇」を作り出し、侗語の [pu]（父）を表わす。なお、この文字資料の初出は明末清初であり、現在でも使用されているという（注 6）。

「変形文字」は、既存の漢字の成分を組み換えたり或いは一部を削ったりなどして本来の形に変形を加えたものである。変形を加えてはいるけれども一見して漢字系統の文字であることは了解できる。このような漢字利用は先に紹介した侗語にも見られるが、ベトナムの字喃（チュー・ノム）は変形文字が比較的充実しており、この文字を使用

する典型とすることができる。字喃は 10～11 世紀に組織化され 20 世紀初頭まで使用された。「巴」(字音)と「三」(字義)を組みあわせて「𠂔」を作り出し、ベトナム語の[ba] (数字の三)を、「天」(字義)と「上」(字義)を組み合わせ「𠂔」を作り出しベトナム語の[caï] (空)を表記する(注 7)。

このような漢字系の変用文字や変形文字を、かつて使用したか、或いは現在使用している民族は次のようである。中国雲南省の哈尼(ハニ)族の文字。これは 20 世紀中頃以前とされる資料が僅かながらあるけれども一般に通行したものではないという(注 8)。先に紹介した湖南省・広西壮族自治区・貴州省一帯の侗(カム)族の文字。江西壮族自治区の壮(チュアン)族の文字。この壮族の文字は、古くは唐代に溯る資料があり現在でも使用されており(注 9)文学作品をはじめ多方面にわたる文字資料が残されている(注 10)。中国湖南省の苗(ミャオ)族の文字。これは清末に苗族の知識人が考案した文字で今でも相当に広い範囲で使用されているという(注 11)。中国貴州省の布依(プイ)族の文字。変用文字主体であるが 80 字ほどの変形文字も報告されている(注 12)。中国雲南省の白(ハク)族の文字。古くは唐代に発し今も使用されている。変用・変形文字であるが時代が降るにしたがい変形文字の使用範囲は縮小し、変用文字のうち仮借の利用が増大する傾向にあるという(注 13)。さらには雲南省と広西壮族自治区の瑶(ヤオ)族の文字もある(注 14)。これらは全て漢語と同様に形態素が単音節主体であり、変用文字と変形文字が併用される。

なお、漢字系の変用・変形文字の使用地域を見ると南方に集中している。これは、北にモンゴル語や満洲語や朝鮮語など形態素が複音節主体の言語があり、南に形態素が単音節主体の言語があることと無関係ではない。北方の諸民族も当初は漢字・漢語を利用していた。その後モンゴル系の契丹は契丹大字を、ツングース系の金は女真文字を創製した。これは「擬似漢字系文字」とするけれども、そこには漢字系の変用・変形文字に相当するものも含まれている。このような例はあるけれども、北方の諸民族は漢字系の変用・変形文字を発展させることはなく、ソグド文字に発しそれを改良したウイグル文字・モンゴル文字・満洲文字・シボ文字を使用した。この系統の文字組織はアルファベットのようには単音を表わす表音文字であり、形態素が複音節主体の言語にとって、漢字系文字よりもはるかに利用しやすかったのであろう。一方、南方の中国少数民族の間で使用された漢字系文字も、1950 年代以降は新中国の政策によりラテン系文字が正式な文字として採用され、現在ではそれに取って代わられる趨勢にある。周辺国のベトナムでも漢字系文字の字喃からラテン系文字に切り替わっており、漢字系の変用・変形文字の使用範囲は急速に狭まっている。

なお、このような漢字の利用は、現代の北方漢語を表記する漢字の中にもみられるし、

南方の福建語や広東語などのなかにも大量にある。その用法は周辺民族の言語を記したものと本質において異なるところはないけれども、漢語の中での変用・変形については漢語方言字という枠組みの中で扱った方が便利であろう。

### 三

漢字系の「派生文字」は、漢字の字形を改変して作り出した新しい文字である。漢字の字形とは似ていないけれども、漢字との間に一定の派生関係が認められる。先の変用・変形文字は、①一見して漢字系統の文字であることが分かり、②漢語を記したものは含めないけれども、派生文字は、①漢字の字形とは似ておらず解釈を経た後に漢字との字形上の関係が判明するものであり、②漢語以外の言語を記したものは当然のこととして漢語を記したものも含める。漢語以外の言語を記したものに日本の仮名があり、漢語を記したものに中国湖南省の女書(ニョシヨ)がある。

日本の仮名には、万葉仮名の草書体より発展した平仮名と、万葉仮名の部分より発展した片仮名がある。「安以」などの草書化より「あい」などが、「阿伊」などの偏より「アイ」などができた。共に9世紀から資料があるという(注15)。これらは日本語の音節を表わす文字として組織され、文字が意味を担うことはない。

女書は中国湖南省の漢語方言を表記したもので、当地の女性のみで使用されることより女書と呼ばれる。外形は縦長の菱形でやや右に傾いている。異体字を含め約3600字報告されている。字形の由来と文字発生の時期については諸説あるけれども、約600の漢字楷書体に基づくもので(注16)、明末清初から清代中期頃に発生し(注17)今に至っているとする説が穏当なところであろう。一字は一音節で、縦に右から左に綴られ、意味の切れ目は明示されないところは漢字と同様であるが、その字形は漢字に似ておらず、音節の利用の仕方も漢字とは異なっていることから、漢字の書体の一種とすることも漢語方言字とすることもためられる。同音および近似音の音節の間で文字の仮借が頻繁に繰り返されたため、結果として特定の字義を担う働きは薄まり、日本の仮名のような音節を表わす表音文字の様相を呈することとなった。このように女書は漢字とは異なる文字組織となっていることから、西田2002にしたがい派生文字とする。漢字・漢文が行われる中、なぜこの様な文字組織が生まれたのかということにつき更なる考究が待たれるところである(注18)。

### 注

(1) 周有光1989「漢字文化圈的文字演變」『民族語文』(1989年第1期、37-55頁)があり、「漢字式文字」という用語のもとに「漢語漢字、江永婦女字(女書)、壮字、布依字、侗字、水字、白字、哈尼字、彝字、傣僳字、瑶字、苗字、西夏字、契丹大字、

契丹小字、女真字、朝鮮文、喃字、日文」の19種をまとめる。ここに言う「朝鮮文」はハングルのことであり、これを「漢字式音素字母」とする。一音節を方形にまとめる点及び文字の筆画が漢字に似ている点により、漢字に由来するわけではないけれども「漢字式文字」とする。字形の系統だけでなく、文字の形式（周有光1989は「漢字格式」とする）も含めて枠組みを設定するところは、西田龍雄1981（「東アジアの文字」『講座言語 第5巻 世界の文字』西田龍雄編、大修館書店、216-278頁）と同様であるけれども、そこに含める文字の範囲は一層広がっている。この構想は早くは周有光1987「漢字文化の歴史と将来」（『漢字民族の決断—漢字の未来に向けて』橋本萬太郎・鈴木孝夫・山田尚勇編著、大修館書店）の附註に見える。しかしながら、民族の接触によって何が起こるかという観点から積極的に異系統の文字を組み入れるという本稿の立場とは異なるようである。

（2）西田龍雄2002『アジア古代文字の解説』（中央公論新社。もと『アジアの未解説文字』大修館書店、1982年）の付記による。281-282頁を参照。

（3）吉池孝一2006「中国周辺の漢字関連文字について」『KOTONOHA』48号、23-27頁を参照。

（4）文字の区別（示差）として、平仮名の「ろ」と「る」、「わ」と「ね」、「め」と「ぬ」などが同じ手順で区別されていることを挙げることができる。この指摘は西田1987「漢字の生成発展と“擬似漢字”の諸相」『書道研究』（1987-9、31-41頁）の31-32頁にある。文字を同類にまとめる（示同）方法として「だ、ば、が」などの濁点がある。このような示差と示同の機能により文字組織の一部である字形は緩やかな体系をなしている。

（5）鶴久1977「万葉仮名」『岩波講座 日本語8 文字』岩波書店、209-248頁、の用例による。

（6）梁敏1980『侗語簡誌』民族出版社、89頁参照。および、趙麗明1991「漢字侗文與方塊侗字」『中国民族古文字研究』天津古籍出版社、215-220頁を参照。

（7）富田建次2001「チュー・ノム（字喃）」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001年、611-618頁を参照。

（8）李永燧/王爾松1986『哈尼語簡誌』民族出版社。152頁を参照。

（9）西田2001「壮文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001年、605-609頁を参照。

（10）梁庭望1991「古壮字及其文献新探」『中国民族古文字研究（第三輯）』天津古籍出版社、150-164頁を参照。

（11）西田龍雄2001「東アジアの諸文字」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』河

野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001年、782-799頁を参照。

(12) 吳慶祿 1991「布依族古籍中的方塊布依字」『中国民族古文字研究(第三輯)』天津古籍出版社、230-244頁を参照。

(13) 王鋒 1996「方塊白文的歷史發展和現狀」『中国民族古文字研究(第四輯)』天津古籍出版社、225-237頁を参照。

(14) 注1の周有光 1989を参照。

(15) 築島 裕 2001「仮名」『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』河野六郎・千野栄一・西田龍雄編著、三省堂、2001年、228-235頁を参照。

(16) 陳其光 2006『女漢字典』中央民族大学出版社を参照。

(17) 宮哲兵 1995「女書年代考」『奇特的女書』史金波・白浜・趙麗明主編、北京語言学院出版社、157-166頁を参照。

(18) 陳其光 2006に次のような興味深い説がある。女書は、宋代以降打ち続いた当地の義軍(瑶族、漢族、他の少数民族を含んでいた)と中央政府との抗争の間において、秘密保持の為に義軍方によって作られ使用されたもので、当初は男性によって作られたけれども、後に使用範囲が縮小し女性のみが使用するに至ったという。